

国際交流活動紹介(2018年度：米国カリフォルニア州)

中山 寛 尚*

広島国際大学 臨床検査学専攻では、2、3年生を対象に『国際臨床検査学』を選択科目として開講している。本研修では、海外の大学や医療機関を訪れ、現地医療施設の見学や、医療従事者、学生とのコミュニケーションを通じて日本と海外での医療制度の背景、医療従事者の役割分担、および資格制度や教育制度の違いを学修する。研修中は現地の一般家庭にホームステイをして、海外の文化や生活を体験し、国際感覚を持った医療人育成を目的とした研修プログラムである。これまでに私は、海外研修を2回担当しており(2018年度：米国カリフォルニア州、2019年度：豪州メルボルン)、本稿では2018年度海外研修内容について紹介する。

研修の準備には、ホストファミリーに対して自己紹介レターを作成し、事前に送付している。ホストファミリーの事前情報をもとに、家族構成、趣味、仕事などを把握してスムーズにコミュニケーションがとれるように準備をする。さらに、研修コーディネーターに来学して頂いて、渡航に必要な書類(パスポート、ESTAなど)の申請、海外生活、文化の注意点などを指導してもらう。私からは米国での留学経験をもとに以下のアドバイスを伝えている。

1. 英語が全く通じないのは当たり前であること
 2. 生き延びる術を考えること
 3. 簡単に“Yes”と言わないこと
- 学生の最大の不安は、英語が通じるかどうか

である。私の経験からして、渡米してある程度会話が成り立つまでに2年間ほどかかった。つまり、10日間程度の研修で英語を聞き取る、話すことは不可能であり、英語が通じないことを割り切って行動しなければならない。ホームステイでは個人で行動するため(緊急時以外は教員に連絡しない)、ホストファミリーに自分で意思を伝える必要がある。綺麗な英語の文章で伝える必要はなく、単語でもジェスチャーでもスマートフォンの翻訳機能でもなんでもよいので、とにかく意思表示をして生き抜くこと(大きさに言えばサバイバル)が最も重要だと伝えている。そして、英語が分からないときに逃げの“Yes”は絶対に使うなと指導する。分からないなら分かるまで聞く、教えてもらおう、自分の意思を貫くことが海外で生き抜くために重要である。

本研修には臨床検査学専攻2年生が18名参加した。参加者のほぼ全員が初めての海外渡航であり、日本から米国カリフォルニアまでの長距離フライトを終え、空港に到着すると時差や緊張で疲れた様子であった。その後、ホストファミリーと面会して早速ホームステイ開始。以下に期間中に訪問した3か所の研修内容を紹介する。

I. Temecula Valley Hospital

テムキュラ市の郊外にあり2013年にオープンした比較的新しい病院である。病床数は140で、救急救命も担う中核病院である。350人の医師、

* 広島国際大学 保健医療学部 医療技術学科 臨床検査学専攻 hironao@hirokoku-u.ac.jp

900人の医療従事者と170人以上のボランティアで構成されている。病院の外観はホテルのようであり、周辺も芝生や緑が多く、素晴らしい環境であった。病室はすべて個室であり、患者とその家族が安心できるような空間が作られていた。学生の反応としては、初めての訪問地で緊張もあったようだが、日本の病院と雰囲気が大きく異なっていること、職員の服装も日本と異なっており気軽に話しかけてくる雰囲気に驚いていた。職員用のカフェテリアも院内とは思えないほど充実しており感心していたようだ(写真1)。

病棟見学のあと、検査部門の見学を行った。とくに病理組織検査部門の紹介を丁寧に頂いた。手術検体の固定、包埋から薄切、染色まで一連の流れを説明して頂いた。しかし、最初の訪問施設で緊張のせいから学生から質問が出なかった。帰国後の報告会では、2年生では病理組織学の講義と実習が終わっていないため、説明を受けても理解が出来なかったようだ。この点は、国内の病院見学でも同様であるため、事前学修の重要性が課題となった。

II. Scripps Clinical Laboratory

サンディエゴ郊外のScripps研究所を訪問した。本研究所は臨床検体の検査に特化した部門であり、近隣の医療機関からのサンプルの解析を行っている。今回は、研究所の案内ツアーに参加

して、各部門の担当者から機器や分析に関する説明を受けた。本施設ではこのようなツアーを多く受け入れているためか、担当者から丁寧な説明をして頂いた。滞在に慣れてきた学生からは、積極的に質問に挑戦する姿がみられた。臨床に関連することよりも、機器に関する質問が多かった。ツアー後は、英語で質問が通じたと喜んでる姿がみられ、コミュニケーションに自信がついたようだ(写真1)。

III. Loma Linda University Health

ロマリンダ医科大学病院では、院内ツアーコンダクターから丁寧な説明をして頂いた。特徴としては、世界初の陽子線がん治療ユニットを含む最先端の医療を提供している。特に小児心臓移植では世界中から患者が訪れるような病院となっている。施設の訪問中には、特別に小児外科病棟への見学が許されたためNICUにおける医療活動を見学することができた。さらに大学病院では、米軍負傷者の治療にも携わっており、見学中に空軍のヘリコプターで移送されてきた患者の様子を見せて頂くことができた。交渉の末、特別にヘリポートの見学も許され、学生のみならず筆者も貴重な体験ができた。

帰国後、日本と米国の医療・文化の相違点についてレポートをまとめ、次年度以降に参加を考えている後輩に向けて報告会を行い、研修を



写真1 病院施設見学の様子

(左)集合写真 Temecula Valley Hospitalにて (右)学生が質問に挑戦 Scripps Clinical Laboratoryにて

完了した。学生の感想として、初めての海外で緊張したが、様々な文化、生活様式の違いが学べたこと、ホストファミリーと楽しく過ごせたことなどが挙げられ、有意義な研修になったようだ。また、研修中のレクリエーションとしてメジャーリーグ観戦やディズニーランドも大変好評であった。当初、心配していた英語によるコミュニケーションも様々な工夫で乗り越えることができ、

大きな自信になったのではないかと思う。短期間の研修ではあるが、実体験することに勝るものはなく、今後の人生の糧になってくれると期待している(写真2)。執筆時2021年1月は未だ新型コロナウイルス感染症との戦いが続いている。再び安全に海外研修を実施するために、早期に収束することを祈るばかりである。



写真2 研修中の生活の様子
(左)ホストファミリーとの記念写真 (右)メジャーリーグ観戦の様子